

駄作者 文福洞先斗

ポンちゃんは民族植物学者なので、美しい花と女が好きだ。今時、こう言う率直な表現をするとすぐにセクシャル・ハラスメントと言われるだろう。美しい物事、事象、人々を愛でることは至極当たり前の心情で、何ら責められることではない。自然美を愛でるに臆することはない。世界史か美術の教科書で、見知ったクレタ島のミノア文明の壁画片に描かれていた少女パリジェンヌの眼差しのように、大らかであってよいのだ。どんな花も女も化粧し、着飾って美しく装っているではないか。それはジェンダーgenderを越えて人々に愛でてほしいからだろう。それなら、無意識下にほどほどのやさしい視線を注ぐくらいは了解されることではないのだろうか。これをもセクハラと責められたら、双方に美を愛でるという人生の楽しみがなくなると言うものだ。しかし、世間のニュースを見聞していると、どうして悪人は女や男で、よい人は女性や男性と表現するのか。性はsexではなく本性natureという意味で使用しているのか、これらの区別の理由がいまだにわからない。良い女や悪い男でもいいではないか。



写真1. クレタ島のパリジェンヌ（Wikipediaより引用）と降矢さんの門男門女

ポンちゃんは齢を重ねたが、明るい服装にしたい。半分あの世に行ったような無彩色の服は着たくない。若者のリクルート・スーツが画一的で黒であることも見心地はよくない。女子高校生に冬でも短いスカートを強要していることも解せない。かわいいとは見えるが、健康に良くないのではないのか。制服など着ても着なくても、当人の選択に任せたらよい。皆さんのファッションが明るくならないと、世間も明るくならないから、お好きな、明るい色調の、着心地の良い服装をしてほしいものだ。

自然文化誌研究会にとっても、ぼくにとっても自然美についての師匠の一人は降矢静夫さん（現上野原市西原）だ。30年近くのお付き合いで、彼から頂いた300通に及ぶ葉書をテキスト分析しようとエクセルに入力している。一瞥してすぐに仕舞い込んでしまった葉書の文面を読み返すと、四季を通じて自然への賛美が、俳句を添えて綴られている。熟読しなかったことが、いまさらながら残念で、申し訳ないとも思う。彼から頂いた門男は植物と人々の博物館のシンボルとして展示してある。民族植物学ノオトの表紙も、彼の制作した門男だ。ただし、彼のユーモアは門女も作ることだ。今、縫っている刺繍の課題は門男・門女と降矢夫妻の四季である。93歳まで生業に勤しんだ最後の山村農人夫妻に、現代文明の最期の先に真文明の未来を見たいと考えている。

ヨーロッパの都市や田舎を巡って、美しい街も大聖堂も、村や農園も、神と人間が協働して創作した自然物の範囲にあるのではないのかと、ふと考えるようになった。大聖堂などは何百年にもわたって建造され続け、あるいは半分崩壊していても維持されているので、現代の風景にもよく馴染んでいるのである。西洋は自然 nature と人工 art を峻別し、東洋は自然と調和しているのだと、多くの日本人は学校教育で教えられるままに、そう信じているようだ。しかし、本当にそうであろうか。少なくとも今は違っていると断言する。これほど自然から隔離された日本人の現代生活は高度経済成長期に前後する、ほんの50～60年ほど前に始まったことだ。今や、ヨーロッパのキリスト教徒よりも、日本教徒のほうが自然を忌避しているように変化してしまったかのように見える。

ぼくは自然を信仰するアニミスト、心は野蛮な原縄文人でありたい。文明人は教養（想い遣り）を失い、彼らこそ悪い心をもつ意味で似非野蛮人だ。人々は豊かな自然から恵みを受けいれて、楽しみ、感謝し、一方で、厳しい自然に抗い、透かし、祈り、信仰してきた。暮らしには苦しみばかりではなく、楽しみも沢山見つけられる。こうした慎ましく、謙虚でありながら、大らかな日々が縄文時代の山里暮らしにはあったのだろう。山里はかつて誰でも受け入れてきた。それはまれびと（折口信夫）であったのかもしれない。文明は自然から遠く離れてはならない。歴史を振り返れば、自然から離れるほどに、都市文明は崩壊に向かった。

原理とは自然に添い生業を営み、その土地から恵まれるもので生活することだ。原則とは原理に沿った自らの働きで地の食料を得て、暮らしを立てることだ。家族が楽しく幸せに暮らす身土不二は、原理である自然は身土、人間も自然に暮らす動物ということで、原則である文化は不二、原理・原則に縁ることだ。このように理解すれば、都市に浮遊する生活は原理や原則に縁らないので、都市民は自然に近い農山村で過ごす時間を意図してもつようにするのがよい。

ことかように理解したぼくは、日本人はいずれ近い機会に自然回帰するだろうと考えて、農山漁村の多面的機能における教育・文化機能および保健・休養機能を提唱したのである。この考え方は、食料・農業・農村基本法の条項にも取り入れられている。ところが、このくにの人々は自然に縁り添う信仰を失い、金権ばかりを拜むようになった。それが不幸の根源だ。今まさに、世界が際どい変曲点を迎えているので、個々人は根底にある大事な物事を探り、自律的に動かなくてはならないと思う。自由を奪われたり、悲惨な飢饉・飢餓の繰り返しはしない。美しかったくにかが小汚く不幸なら、改めて、素のままの美しい暮らしに切り替えながら楽しく幸せに過ごそう。生業・基層文化を大切に継承し、学ぶなら、真文明への移行はできるかもしれない。そこで最期の未来を縄文時代後・晩期に探してみることにした。まだ国がなく、被支配の野蛮人たちが自然の中で自由に生業を営み、暮らしていた長い時間であったと思うのだ。狩猟・採集、初期農耕などの生業を営んでいたが、産業としての農業を強要されてはいなかった、すなわち、労働を強要する城市国ポリスはまだ発達してはいなかった。

生きるために、家族を守るために、野生動物・植物を狩猟・採集し、栽培化過程にあったいろいろな半栽培植物・保険作物を作ってきたのだ。半栽培段階にある植物は近縁野生種と雑種を作り、その野生種も収集されて穀物になっていた。本物の善き野蛮人たちの生活はとても複雑な原初の里山生態系をなしていたのである。水稻が作れなくて、稲の消費を節約するために、麦・雑穀、イモ・マメや野菜を混合して、調理してきたのではない。

多様な穀物＝雑草複合を継承する価値体系は、国権力の基盤である租税・石高、さらに商品、食糧戦略物資としての水稻とは異なる価値体系にある。縄文文化の山棲の系譜による伝統的知識体系の価値を、改めて認知すべきである。縄文時代中・後期から晩期にかけて、温暖な海進の時代の丘陵では狩猟・採集から小規模家族農耕を含めた複合的生業が行われ、当時としては世界的に見ても多くの人口を維持したようだ。海が後退し、平坦湿地が拡大すると、ここに水田稲作を導入して、その高い生産を求めて人々を移定住させていったのが弥生時代だろう。集落が拡大し、自己家畜化された人々に農業労働を強要して、生産・貯蔵できる水稻の栽培が国権力を成立させたようだ。その後も、平地の城市ポリスからすると、丘陵は順わぬ辺境であった。これら辺境は自由な山民の穏やかな暮らしとともに、服わぬ権力敗者

をも受け入れてきた。

世間では、CO₂などの温室効果ガス排出による気候変動を騒いでいるばかりで、現実的には課題解決をしようとはしていない。この処、元凶とされるCO₂などを減らすだけでよいのだろうかと疑問に思うようになった。気候変動はもっと大きな地史的变化に縁っているのではなかろうか。CO₂は植物の光合成になくてはならないもので、悪者ではない。問題は化石資源に大きく依存する生活様式にあるので、ここを変えない限り解決はしない。電気自動車に乗っても、電気を化石資源や放射性物質を用いて作っては、都市の汚染が見えるところで減るのみで、見えない所では悪くなるばかりだろう。現代都市文明の過剰な便利さと刹那的虚無こそが、深い心のなかの問題である。

人口増加で食糧戦略に翻弄される。激増する人口を糊する為に、現代の農業技術による食料の大量生産は必要だが、他方で、家族のために安全食材を得ようとするのなら、楽しくできる範囲で、ささやかでも自給農耕をするのが良い。都市への人口集中は病気の感染流行を促す。都市民のために家畜を狭い場所で多数飼育すると、家畜もパンデミックを起こす。家畜も野外で健康に過ごす方がよいのだ。

北極の氷が解けても海面はあまり上昇しないという理屈（アルキメデスの原理）はわかるが、気候変動によって、高山や南極・グリーンランドなどの陸地氷床が融ければ、いつかは縄文海進のように海面上昇を起こすだろう。この変化過程は複雑な海流や陸地の動きにも関連するようだ。とはいえ日本列島で海進が進めば平坦地が減少し、水田稲作の適地が少なくなる。一方で、温暖化や砂漠化が進行すれば、熱帯病害虫も北上するために、人々も家畜も縄文時代のように丘陵地に移住せざるを得ない。丘陵地では広くて平らな耕地は得られない。そこで、C₄植物である雑穀類の有効性が高まる。安全な食材、多種多品目は、手間暇かけても良い小規模家族自給農耕によってしか作れない。食料資源的に見て、魚食、肉食を漸減して、マメやイモ類を含む穀菜食を広める方向に行く必要が出てくる。このためには伝統的な知識・技術体系を、身をもって継承しておかなければならない。世間が無視していてもめげずに、今、受け継がなければついに断絶してしまう。 (2020.2.15)



写真 2：降矢さんとシコクピエ



写真 3：小菅村の縄文土器片（守屋秋子さん所蔵、安孫子昭二さん撮影）、三内丸山遺跡の復元住居